

鉄に乾杯！ 呑み鉄の旅は続く

俳優 六角精児氏



六角精児（ろっかく・せいじ）
1962年兵庫県生まれ。82年に劇団「善人会議」（現・扉座）の旗揚げに参加。テレビ朝日「相棒」シリーズで人気を博す。鉄道好きで知られ、NHK BS「六角精児の呑み鉄本線・日本旅」に出演。音楽活動も続け、六角精児バンドのサードアルバム「ともだちのうた」が好評発売中。

僕が鉄道に興味を持ったのは30代後半の頃です。劇団の地方公演の移動で電車に乗っているうちに、鉄道の旅が好きになりました。特に気に入っていたのは夜行列車です。お酒を呑みながら夜景を見ていると、車窓が色づいて、幻想的な気分させてくれるのがたまらないですね。

これまで日本全国のほぼ全路線を乗り尽くしましたが、単なる移動手段としてではなく、自由気ままに途中下車して、その土地ならではの魅力に出会うことが、今では僕の鉄道旅の楽しみ方になりました。車窓に広がる景色に浸りながら呑む。この至福のひとときを味わいながら、自分だけの穴場スポットを探るように酒蔵や温泉を訪ね、日本を再発見しています。

おすすめの路線は山がありますが、そのなかで真っ先にあげたいのは、僕が歌までつくった只見線です。福島県の会津若松と新潟県の小出を結ぶ路線です。車窓には、春から夏にかけては新緑、秋は紅葉、冬には雪景色と、四季折々に美しい表情を見せる山川、溪谷、そして里山が広がり、日本の原風景を堪能できます。次におすすめしたい路線は、釧路と根室を結ぶ花咲線です。ヒグマやオオジロワシなどが息づく湿原や牧場の緑がまぶしい北の大地を走り抜けると、断崖絶壁の海岸線に打ち寄せる白い波と限りなく透明な青い海が広がる太平洋が現れます。北海道の雄大さを感じることができます。

旅番組のメインテーマ曲として流れている「ディーゼル」は、僕たちのバンドの楽曲です。作詞は劇作家の中島淳彦さんで、上京して何も自慢できるもの



がないまま故郷に帰る切なくほろ苦い気持ちが込められています。そして軽快なカントリのリズムが、人生の悲哀や、ローカル線をトコトコ走る電車に身をまかせる旅情とマッチして、呑み鉄の旅を盛り上げています。

人生の悲哀といえば、僕の若い頃は劇団以外にやることがなく、酒とギャンブルの日々でした。ため息が深くなり、そのため息の深さみたいなものを蓄積させていました。でも昔の自分も今の自分も、そのまま自分で、それがこの先につながっていく。余計なことは考えず、目の前にある仕事や人のことをしっかり考えてやればいい。そのまま生きればいいじゃないか。そんな葛藤をしていた僕と、「ディーゼル」の歌詞はどこか似ているところがあります。

鉄道旅はのんびり走るローカル電車もいいのですが、やはり速く走る高速車も魅力の1つです。海岸線や山間、都会のビルの谷間などのカーブを、しなやかに走り抜ける特急には、空気がねの伸縮を利用した車体傾斜制御装置の付いた車両やカーブで振り子のように車体を傾ける振り子車両があり、遠心力を軽減し乗り心地を改善しながらスピードを落とすことなく走ることができます。こうした鉄道技術の進化が、安全で快適な旅にいざなってくれています。

振り返ってみると、レール、車輪、車軸、台車枠といった鉄道の部品は、すべて鉄でつくられています。僕たちの鉄道旅を鉄が足元から支えてくれています。「鉄に感謝」しながら、これからも呑み鉄の旅を楽しんでいきます。鉄に乾杯！（談）